

近代語における行為要求を表す「られたし」

——CHJ・SHCにおける調査から——

劉 洋

[キーワード：①行為要求 ②近代語 ③通時的变化 ④受影願望 ⑤
尊敬]

1. はじめに

現代語における願望表現の「られたい」は受影願望、行為要求、尊敬など、3つの意味を表す。それらの例は以下の通りである。

I 受影願望表現¹⁾

- (1) フロイトは、人がなぜ夢を見るかについて、現実にあってほしいと願う気持ちが夢となって表現されるのだと述べている。つまり、ウルフウッドは子供たちにすべてを告げて懺悔し、自分の罪を贖いたい、許されたいと願っているのだ。

(渡辺水央『Trigun maximum 深層心理解析書』PB17_00157)

II 行為要求表現

- (2) 詳しくは、第六章を参照されたい。

(林總『経営コンサルタントという仕事』LBi3_00008)

III 尊敬表現

- (3) 過去記事を参照されたいときご利用ください。

(Yahoo! ブログ 2008 年 OY14_25766)

本稿はこうした三用法の通時的な変化に焦点を当て、近代語における行為要求を表す「られたし」について考察を行う。

近代語における行為要求の例²⁾は以下の通りである。

- (4) 第二十三番は即ち胡簡氏なりき胡簡氏は此事を聞くより甲板に出て来りしが彼の闍金九十六弗を受取ると其儘に船長安得孫の所に持ちゆきコハー昨日不幸にも大荒れの際其職に斃れし彼の水夫の遺族に贈られたしと云へるに船長は黙して頭を点じつつ胡簡氏の手を執りて堅く之を握り謝せり

(ジュール・ベルヌ (作)／森田思軒 (訳)『大東號航海日記 (八)』60M 国民 1888_20007)

- (5) 既にサー、チャーレス、ルツセル氏よりパーネル氏の罪跡を證する夫のフィニツキス公園謀殺教唆状なるものあれば、猶豫なく法廷に持來れ、と要求されしも、夫のウェブスター氏は之を拒むて斯る必要なしと主張せり、是於てルツセル氏は氏の要を實行されたき旨を法官に迫り、遂に法官よりも亦其意をタイムス方の代言人に通ずる場合となり、斷然右の物件 (即ちパーネル氏の實筆なりと云ふ例の有名なる手紙等) を法廷に提供すべしと命ぜらる

(天民生 (作)『龍動タイムスとパーネルとの大訴訟 米國人民の舉動及び注意』60M 国民 1888_35005)

- (6) 願くば府會議員の諸氏も此邊に注意して盡力あられたし吾人は實に此の演説に同意を表せんと欲する者なり

(文部大臣：森『森文部大臣の演説』60M 国民 1888_31024)

2. 先行研究と問題点

日本語文法学会(2014: 152-153)によると、「平安末期頃から助動詞タシが登場する。タシは形容詞イタシから生じたとされる。マホシに比べると、俗語的性格が強かったようである。…タシは鎌倉期以降、マホシに代わって希望の助動詞として定着していった」という。行為要求を表す「られたし」の現代語形「りたい」の意味・機能については、これまで「敬語」(日本国語大辞典 2006: 5234)、「受身表現から派生されたもの」(劉笑明 2006: 133)、「間接受身」(劉洋(投稿中))などの見解があるが、近代語における行為要求の「られたし」に関しては通時的に言及されていない。したがって、近代語における行為要求を表す「られたし」はどのような通時的特徴があるか、検討する余地があると思われる³⁾。

3. 研究課題

本稿は次の研究課題をめぐって、コーパスを利用し、近代語の行為要求表現「られたし」の通時的变化を明らかにする。

- i 近代語における願望表現「られたし」の下位分類の分布(4.2節)
- ii 近代語における行為要求を表す願望表現「られたし」における動詞の特徴(4.2.1節)
- iii 代語における行為要求を表す願望表現「られたし」の通時的特徴(4.2.3節)
- iv 近代語における行為要求を表す願望表現「られたし」が使用されるレジスターの特徴(4.2.4節)

iでは、「られたし」の下位分類用法に関して通時的に考察する。具体的に、行為要求用法の分布がどのように変化しているかについても論じる。

一方、ii～ivでは、主に近代語における行為要求表現「られたし」について、共起動詞の特徴、成立年代と「られたし」の出現位置の関連性、レジスターの分布を調査し、近代語における行為要求を表す「られたし」の通時的な特徴を探る。

4. コーパス調査

4.1 コーパス調査の概要と検索条件

本稿のコーパス調査対象は、『日本語歴史コーパス』(CHJ)、『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)である。その検索条件は以下の通りである。

検索条件

キー：品詞 の 大分類 が 動詞

後方共起1：キーから 1 語

語彙素 が れる・られる

後方共起2：キーから 2 語

語彙素 が たい

4.2 コーパスの検索結果

本節は歴史コーパス CHJ と昭和・平成の書き言葉コーパス SHJ を調査し、劉洋（投稿中）が提唱する受影願望、行為要求、尊敬の三用法の分布変化を明らかにする。

表1：CHJ・SHCにおける「られたし⁴⁾」の時代別出現頻度、比率と順位⁵⁾

時代名 \ 用法	受影願望 (%)	行為要求 (%)	尊敬 (%)	合計
奈良	0	0	0	0
平安	0	0	0	0

近代語における行為要求を表す「られたし」(劉洋)

鎌倉	0	0	1 (100.00) ①	1 (100.00)
室町	1 (50.00) ①	0	1 (50.00) ①	2 (100.00)
江戸	6 (100.00) ①	0	0	6 (100.00)
明治	23 (15.65) ②	117 (79.59) ①	7 (4.76) ③	147 ⁶⁾ (100.00)
大正	20 (27.40) ②	53 (72.60) ①	0	73 (100.00)
昭和	151 (51.71) ①	138 (47.26) ②	3 (1.03) ③	292 (100.00)
平成	161 (88.95) ①	15 (8.29) ②	5 (2.76) ③	181 (100.00)

まず、調査結果の全体像に関しては、鎌倉期以前の「られたし」データが存在しないことがわかる。表1のように、行為要求を表す「られたし」の出現割合は明治(79.59%)・大正(72.60)期に圧倒的に多い(出現率1位)が、昭和期から減少し、平成期以降は激減しており、2位に転落していることが注目される。CHJに収録されている明治・大正期の施政方針に関する文脈が多いことは原因の一つであると思われる。

一方、尊敬用法は鎌倉期以降減少し、少数派になっている。それに対して、受影願望用法は明治期以降、一時的減少しているが、昭和期以降急増している。よって、明治・大正期に多数派の行為要求表現「られたし」の特徴は、検討する価値があると考えられる。

4.2.1 行為要求を表す「られたし」の共起動詞に関する通時的变化

次に共起動詞の歴史的特徴を見る。

表2: CHJにおける共起動詞の分布

共起動詞	異なり語数	延べ語数 (%)
為る (89)	1	89 (52.35)
送る (6)	1	6 (3.53)
知る (4)、許す (4)	2	8 (4.71)
示す (3)、置く (3)	2	6 (3.53)

致す (2)、養う (2)、渡す (2)、待つ (2)、遊ぶ (2)、図る (2)、仰せ付ける (2)、心得る (2)、諒する (2)、寄せる (2)、努める (2)、期する (2)、付ける (2)	13	26 (15.29)
捨て置く (1)、返す (1)、留め置く (1)、持つ (1)、遇する (1)、居る (1)、結ぶ (1)、教わる (1)、施す (1)、覚ます (1)、臨む (1)、成る (1)、遊ぶ (1)、扱う (1)、聞かす (1)、尊ぶ (1)、救う (1)、贈る (1)、対する (1)、携える (1)、求める (1)、命ずる (1)、設ける (1)、勤める (1)、徴する (1)、聘する (1)、任せる (1)、心掛ける (1)、察する (1)、与える (1)、試みる (1)、労する (1)、授ける (1)、処する (1)、見る (1)	35	35 (20.59)
合計	54	170 (100.00)

表 3：CHJ における「する」類

～されたし／せられたし	異なり語数	延べ語数 (%)
附記 (7)	1	7 (7.87)
注意 (6)	1	6 (6.74)
～に (明らか 1、様 2、お土産 1)	1	4 (4.49)
説明 (3)、記述 (3)	2	6 (6.74)
実行 (2)、許可 (2)、公示 (2)、名詞句 (人、者) +と (2)、様 (2)、承知 (2)、熟考 (2)、見合 (2)	8	16 (17.98)
想像 (1)、工夫 (1)、了解 (1)、参照 (1)、翫味 (1)、傾聴 (1)、選択 (1)、着目 (1)、會得 (1)、討究 (1)、主張 (1)、執行 (1)、放免 (1)、供給 (1)、議論を (1)、除名 (1)、盡力 (1)、公開 (1)、計畫 (1)、發布 (1)、選任 (1)、研究 (1)、増加 (1)、製造 (1)、圖解をも (1)、詳述 (1)、調査 (1)、領収 (1)、布告 (1)、談判 (1)、推舉 (1)、採用 (1)、返戻 (1)、提議 (1)、執筆 (1)、設立 (1)、配布 (1)、留意 (1)、參看 (1)、撤回 (1)、諒知 (1)、處置 (1)、賛成 (1)、報告 (1)、総轄 (1)、努力を (1)、帶同 (1)、警戒 (1)、保存 (1)、任命 (1)	50	50 (56.18)
合計	63	89 (100.00)

表3から、CHJでは和語動詞より「する」類動詞のほうが若干多いことがわかる。さらに表4から、「する」類動詞に関して、意味・機能的に偏りが無いこともわかる。このことから、明治・大正期における行為要求を表す「られたし」は生産性の度合いが比較的に高い無標表現であると思われる。

一方、昭和・平成期における行為要求を表す「られたし」の共起動詞を見る。

表4：SHCにおける共起動詞の分布

共起動詞	異なり語数	延べ語数 (%)
為る (92)	1	92 (68.15)
見る (9)	1	9 (6.67)
許す	1	5 (3.70)
読む (4)、努める (4)	2	8 (5.93)
合わせ読む (2)・取り計らう (2)、差し控える (2)、与える (2)	4	8 (5.93)
因る (1)・振るう (1)・食わず (1)・差し出す (1)・渡す (1)・差し置く (1)・譲る (1)・示す (1)・慎む (1)・赴く (1)・置く (1)・返す (1)・行う (1)・遣る (1)・除く (1)・立ち寄る (1)・取る (1)・出向く (1)・致す (1)・遊ばす (1)、引き受ける (1)、寄せる (1)、仰せ聞ける (1)、考える (1)、始める (1)、取り調べる (1)、買入れる (1)、避ける (1)、抱える (1)、命ずる (1)、諒する (1)	31	31 (22.96)
合計	40	135 (100.00)

表 5：SHC における「する」類

～されたし	異なり語数	延べ語数 (%)
「参照」系 (参照 (4)、参照 (4))	1	8 (8.70)
注意 (6)	1	6 (6.52)
一任 (5)	1	5 (5.43)
努力 (4)、一読 (4)	2	8 (8.70)
併読 (3)、想起 (3)	2	6 (6.52)
出席 (2)、注目 (2)、検討 (2)、訂正 (2)、堪能 (2)	5	10 (10.87)
上京 (1)、想起 (1)、移送 (1)、熟読 (1)、対処 (1)、処刑 (1)、理解 (1)、要求 (1)、要請 (1)、帰国 (1)、来訪 (1)、猶豫 (1)、提出 (1)、挿入 (1)、諒承 (1)、閲讀 (1)、指示 (1)、必讀 (1)、納得 (1)、配慮 (1)、確立 (1)、樹立 (1)、記憶 (1)、徹底 (1)、手交 (1)、了承 (1)、期待 (1)、味読 (1)、実現 (1)、公表 (1)、気付に (1)、参考に (1)、死刑に (1)、決定を (1)、『君』どまりに (1)、報告することと (1)、明朗に (1)、組織 (1)、禁止 (1)、勉強 (1)、贈與 (1)、承知 (1)、壯と (1)、保存 (1)、實行 (1)、延期 (1)、下附 (1)、節約 (1)、奉答 (1)	49	49 (53.26)
合計	61	92 (100.00)

表 5 から、SHC では和語動詞より漢語動詞のほうが多いことがわかる。CHJ における表 2 と比較した結果、「する」類動詞の出現比率はさらに増加していることが注目される。また表 5 から、「する」類動詞に関して、「読む」系の動詞 (参照系、「一読」、「参照」、「併読」、「熟読」、「閲讀」、「必讀」、「味読」、「参考に」) が 20 例あることが注目される。このことから、昭和・平成期における行為要求を表す「られたし」は異なり語数が減少している (共起動詞の異なり語数：54→40、「する」類動詞の異なり語数：63→61) ため、生産性の度合いが低下しているといえる。

昭和・平成期の例は以下の通りである。

昭和8年(1933年)

- (7) 但し會社の内容などは、公表す可きでなき爲、取扱ひませんから
注意されたきこと、一、メ切期日は毎月末たること…

(『「金の身上相談」の質問を募る』70M 中公 1993_02042)

昭和56年(1981年)

- (8) というのは、七月四日にダレスが吉田首相に宛てて、「講和会議には首相自身が出席されたい」、「講和全権団の構成は超党派的なものが望ましい」という書簡をよこしたからであった。

(戸川伊佐武(作)『日本が少年だったころ』70M 文春 1981_11056)

平成9年(1997年)

- (9) 広辞苑の「専門家」の意味と、証券取引法の第一条の目的、精神と第二条の定義を熟読されたいものだ。

(匿名希望(作)『三人の卓子 気になる用語の乱れ』80M 文春 1997_07073)

平成25年(2013年)

- (10) その処方箋については、拙著『レジーム・チェンジ：恐慌を突破する逆転の発想』(NHK 出版新書)を参照されたい。

(中野剛志(作)『「反ポピュリズム」というポピュリズム』80M 文春 2013_01128)

4.2.2 行為要求用法の出現位置に関する通時的变化

本節は、近代語における行為要求を表す「られたし」の文中での出現位置について、後方共起の通時的特徴を検討する。

表 6：CHJ における行為要求用法が現れる位置

用法	パターン	延べ語数	計 (%)
文末用法	られたし。	34	72 (42.35)
	られた (度) い。	33	
	られ度。	2	
	られたし (、) …	3	
引用用法	られたし + と + 動詞句	19	40 (23.53)
	られたい + と + 動詞句	4	
	られたいといふやうなこと	1	
	られ度 (たし) との名詞	4	
	られ度思召候	1	
	られたく願ひあげ候	1	
	られたく思ふ	1	
	られたしとて + 動詞句	1	
	られたし (。』) とて、…	3	
	られたしと兼てより申出で置かれしとぞ。	1	
	られ度願ふ所	1	
	られたし云々といふ	1	
	られたしと。(、)	2	
	準文末用法	られたき旨	
られたきこと (事)		16	
られ度きことなり		1	
られたき事なり		1	
られたき事こそ		1	
られ度き一事に候		1	
られたい (度) + 名詞句 (事、命)		3	

近代語における行為要求を表す「られたし」(劉洋)

られ度候	2	
られたく候	1	
られたく(、)	5	
られたく動詞(望む)なり	1	
られ度く…	1	
られたいもの(ん)だ(です)	3	
られ度(たき)ものなり	6	
られた(度)いのである(のです・のであります)	6	
られ度のである	1	
られ度いのである	3	
られ度きものに候	1	
られたいが縁で	1	
合計	170	170 (100.00)

表6から、文末用法(42.35%)が多いことがわかる。また、引用用法は文法的に文末用法に近いので、文末の位置で用いることが中心的な用法であるといえる。さらに、丁寧体⁷⁾、モダリティ要素との共起も一定数あるとわかる。

一方、昭和・平成期の出現位置は、近代とは若干異なっている。

表7：SHCにおける行為要求用法が現れる位置

用法	パターン	延べ語数	計(割合)
文末用法	られた(度)い。	69	84 (54.90)
	られたし。(、)	15	
引用用法	られたい++動詞句	20	41 (26.80)
	られたい+という。	1	
	られたいと冀ふものである。	1	

	「られたい」+として+動詞句	2	
	「られ度い」と+動詞句	1	
	「られたし」と+動詞句	4	
	「られたしとは…」動詞句	1	
	「られたし」との+名詞句（伺書、希望）	2	
	「られたい」との+名詞句（意見、注文）	3	
	「られたい（し）」という（ふ）+名詞句（こと、要求）	2	
	「られたい」という（ふ）+名詞句	3	
準文末用法	「られたいもの」の一つである	1	28 (18.30)
	「られたき（い）」+名詞句（旨、こと）	6	
	「られたき由申出でしかば、…」	1	
	「られたきこと。（、）【文末】	12	
	「られたく、…」	4	
	「られたいが、…」	2	
	「られたいものだ	2	
合計		153	153 (100.00)

表7から、明治・大正期より昭和・平成期における文末用法はさらに増加している（42.35%→54.90%）ことがわかる。引用用法も若干増加している（23.53%→26.80%）ことがわかる。また、準文末用法は明治・大正期より昭和・平成期のほうが半減している（34.12%→18.30%）ことも注目される。

4.2.3 成立年代の通時的变化

次に、成立年代について論じる。

表 8 : CHJ における時代分布

時代名	粗頻度	レジスター語数 (短単位) ⁸⁾	PMW ⁹⁾
明治	117	10605431	11.03
大正	53	5355716	9.90

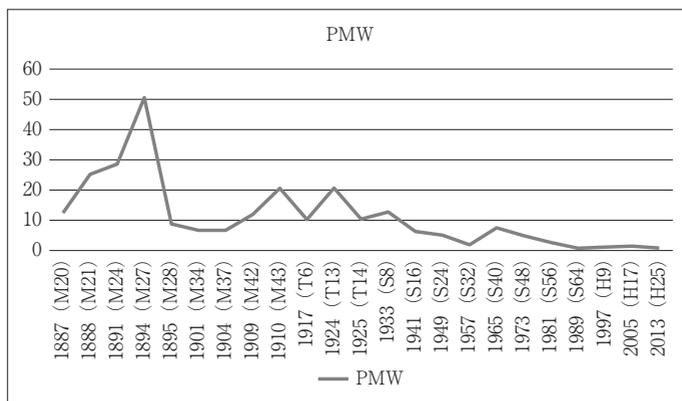
表 8 から、明治期の PMW が大正期よりやや多く、出現率が高いことがわかる。次に、成立年別に出現率を見る。

表 9 : CHJ・SHC における成立年の分布¹⁰⁾

成立年	粗頻度	年代語数 (短単位) ¹¹⁾	PMW
1887 (M20)	5	402447	12.42
1888 (M21)	19	754588	25.18
1891 (M24)	1	34951	28.61
1894 (M27)	18	356049	50.55
1895 (M28)	23	2626886	8.76
1901 (M34)	15	2247236	6.67
1904 (M37)	1	149801	6.68
1909 (M42)	33	2771584	11.91
1910 (M43)	2	97032	20.61
1917 (T6)	21	2047564	10.26
1924 (T13)	1	48357	20.68
1925 (T14)	31	2986271	10.38
1933 (S8)	52	4071554	12.77
1941 (S16)	20	3157856	6.33
1949 (S24)	8	1580021	5.06
1957 (S32)	8	4168811	1.92
1965 (S40)	23	3058379	7.52
1973 (S48)	17	3485980	4.88

1981 (S56)	10	3793261	2.64
1989 (S64)	3	3876540	0.77
1997 (H9)	4	3563127	1.12
2005 (H17)	5	3528802	1.42
2013 (H25)	3	3741553	0.80

まず、表9の折れ線グラフは以下の通りである。



グラフ1：行為要求を表す「られたし」のPMWに関する通時的変化

グラフ1に示されているように、明治20年(1887年)以前の行為要求を表す「られたし」は検査結果に出現しなかった。大正・昭和・平成期より明治期が多いことも注目される。明治期における使用が大きく変動しているが、比較的が多い傾向が見られる。一方、大正期は若干増加しているが、昭和・平成期以降、全体的に減少傾向に転じていることが注目される。

大正・昭和・平成期の例は以下の通りである。

大正期(1925年)

- (11) 次に、型式試験規則合格のものには、更に、只單に、擴大器—增幅器ともいふ—と稱する、前記眞空管檢波装置に依て、人の耳に

近代語における行為要求を表す「られたし」(劉洋)

聞かれる可聴波となりたるものを、更に擴大せしめ、前者に十數倍する音聲を受話器に發生せしめる装置もあるが故に、前述の同調装置並に檢波装置に對し更にこの擴大装置を接續するときは、受話器にて百哩、ラウドスピーカー(擴聲器)にて五十哩以上を距てて容易に聴取することが出来る、ここで、一寸お斷りせねばならぬのは、普通に受話器といふ場合は、テレフォン、即ち耳に當てるものをいふので、受信機といふのが、聴取器のことであるから、これだけはよく吞込んで置かれない。

(田村正四郎(作)『最も經濟的な無線電話装置法』60M 太陽 1925_01114)

昭和期(1933年)

- (12) 三四年休んだ彼はそれだけためてゐる筈だから當分それで縦横無盡に健筆を揮はれたい。(『読売新聞 <1933-11-02-第 20373 号>』70P 読売 1993_B2003)

平成期(1997年)

- (13) …公職選挙法改正要望事項の中で、「投開票機の開発、採用について、法改正も含め積極的に検討されたい」として、次のように述べている。

(宮川隆義(作)『選挙で政治家名記入は日本だけ』80M 文春 1997_04038)

- (14) ミステリー紹介の欄でこういう作品を取り上げるのは場違いなのだが、しかし番外篇として今回だけは許されたい。これはそれだけの価値がある作品だ。

(北上次郎(作)『文春ブック倶楽部 北上次郎のミステリー道場』80M 文春 1997_11065)

4.2.4 レジスター

最後に、レジスターの特徴について見る。

表 10：CHJ におけるレジスターの分布

レジスター	粗頻度	レジスター語数 (短単位)	PMW
新聞	8	117328	68.18
教科書	4	114733	34.86
雑誌	156	4910662	31.77
小説	2	185687	10.77

表 10 から、新聞における使用が最も多いことがわかる。また、新聞が教科書の 2 倍程度高いことも注目される。

表 11：SHC におけるレジスターの分布

レジスター	粗頻度	レジスター語数 (短単位)	PMW
雑誌	137	31120433	4.40
新聞	10	2937041	3.40
ベストセラー書籍	6	3196208	1.88

表 11 から、昭和・平成期の行為要求表現「られたし」に関しては、明治・大正期と異なり、雑誌が最も多く使用されているが、雑誌、新聞などでの出現率が激減していることが注目される。

最後に、明治・大正期における文体の特徴について見る¹²⁾。

表 12：CHJ における文体の分布

文体	粗頻度	文体語数	PMW
文語	112	460965	242.97
口語	58	4892617	11.85
合計	170		

表 12 から、明治期と大正期の行為要求を表す「られたし」は文語のほうが比較的が多いが、口語における使用例もあることもわかる。

5. 結論

本稿では、CHJ、SHC を用いて、明治・大正・昭和・平成期における行為要求を表す「られたし」の通時的特徴について分布を調査した。その結果、「られたし」に関しては、明治・大正期の行為要求用法の出現率が最も多いことがわかった。その後、昭和・平成期における使用は減少していることも明らかになった。さらに、明治中期以降、出現率が著しく変動しているが、文末で用いるのが最も中心的な用法であることがわかった。一方、レジスター別の特徴に関しては、新聞、教科書、雑誌が多いが、明治・大正期から昭和・平成期、各レジスターの出現率が減少していることもわかった。なお、行為要求を表す「られたし」、「られたい」の表記と文体の関連性については今後の課題としたい。

参考文献

- 熊井浩子 (2006) 「ラレタイの意味と機能」『静岡大学留学生センター紀要』5: 1-14.
- 熊井浩子 (2010) 「ラレタイとテモライタイの意味と用法に関する考察」『静岡大学国際交流センター紀要』4: 1-21.
- 小学館 (編) (2006) 『日本国語大辞典』小学館.
- 日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』大修館書店.
- 劉 笑明 (2006) 『日本語情意表現の記述的研究』南開大学出版社.
- 劉 洋 (投稿中) 「行為要求を表す願望表現「られたい」」.

コーパス

- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間淵洋子編 (2023) 『昭和・平成書き言葉コーパス』(バージョン 2023.5, 中納言バージョン 2.7.2)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/> (2024年4月30日確認)
- 国立国語研究所 (2024) 『日本語歴史コーパス』(バージョン 2024.3, 中納言バー

ジョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2024年4月30日確認)

(日本語日本文学専攻博士後期課程2年)

注

- 1) 本稿で扱う受影願望表現とは、直接受身の願望表現を指す。
- 2) (4)～(6)は1888年(明治21年)の例文である。
- 3) 熊井(2006、2010)は「られたい」と「てもらいたい」の相違点をめぐって、直接受身表現としての「られたい」の特徴のみを論じているが、行為要求表現用法の「られたい」に関する記述はない。
- 4) CHJとSHCにおけるデータを精査した結果、「られたし」「られたい」の表記が混在しており、便宜上、すべて「られたし」に統一する。
- 5) 表のデータについて、数字は頻度、()内は当該用法の同一時代における割合、○内は順位である。
- 6) 御隨身近友が自讃とて、七箇条書きとどめたる事あり。皆、馬芸、させることなき事どもなり。その例を思ひて、自讃の事七つあり。一、人あまたつれて花見歩きしに、最勝光院の辺にて、男の馬を走らしむるを見て、「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて、落つべし。しばし見給へ」とて立ちとまりたるに、又馬を馳す。止むる所にて、馬を引き倒して、乗る人泥土の中にくろび入る。その詞のあやまらざる事を、人みな感ず。一、当代、いまだ坊におはしましし比、万里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四、五、六の巻をくりひろげ給ひて、「ただ今御所にて、紫の朱奪ふことを悪むといふ文を御覧ぜられたき事ありて、御本を御覧ずれども、御覧じ出されぬなり。(吉田兼好『徒然草』第二三八段)
- 7) 「なふその、こはひかほに、そふことはいややなふ「こはのはなの大きさや「それならばふたりながらくはふ、ああ／＼「ああおたすきやれ、仰らるるやうにいたさう「なふよういふた、かはひのものや、いざほうらいの嶋へゆかふ「おそろしけれども、くはれたうはおりなひほどに、まいらう「いざさらばこちへわたしめ「まづまたせられひ、かみをもとりあげて、かほをしてまいらふ「尤よからう「その子はおれがだかふぞ(大蔵弥太郎虎明『虎明本狂言集・鬼の継子』)
- 8) 第二十七. 法皇大原に御幸為され、女院に御見参有った事. 右馬. 扱も哀れな事有ったなう: その女院の御事をもちと御語り有れ. 喜. 文治

二年の春の頃法皇は女院の大原の閑居の御住まいを御覽ぜられたう思し召されたれども、如月弥生の程は余寒も猶激しゅう、峰の白雪消え遣らいで、谷の氷柱も打ち解けず：さう有って春過ぎ、夏にも成り、賀茂の祭りの頃に思し召し立たれた。(『天草版平家物語巻』第四・第二十七)

- 9) 明治期データの内訳：合計 149 件、ゴミ 2 件、採用件数 147 件。
- 10) 日本語文法学会 (2014: 383) によると、「候」は現代語の丁寧体「マス」に近い表現であるという。
- 11) CHJ の短単位語数表 (<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/chj-wc.html>) による。
- 12) PMW (Per Million Words) とは、100 万語あたりの頻度 (調整頻度) を指す。
- 13) 年号表記：M=明治、T=大正、S=昭和、H=平成。
- 14) 年代語数は『短単位語数表』(記号・未知語等を含む場合) (ver.202303) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/chj-wc.html> を参照。
- 15) 精査した結果、SHC の文体語数表が公開されていないため、昭和・平成期の文体に関する統計を割愛する。

Expressing Desires for Action Requests:
The Use of the Volitional Expression “*raretashi*” in Modern Japanese

LIU, Yang

In modern language, the expression “*raretai*” can convey three meanings: passive desire, request for action, and respect. This paper focuses on the temporal changes of these three usages and examines the expression “*raretashi*” in early modern language. According to the Japan Society of Language and Grammar (2014), “Around the late Heian period, the auxiliary verb “*tashi*” began to appear. “*tashi*” is considered to have originated from the adjective “*itashi*”. It seems to have had a stronger colloquial character compared to “*mahoshi*”. From the Kamakura period onwards, “*tashi*” gradually replaced “*mahoshi*” and became established as the auxiliary verb expressing hope.” As for the modern form “*raretai*” of the expression indicating a request for action, various interpretations have been proposed such as “honorific language” (Nihon Kokugo Daijiten 2006), “derived from passive expressions” (Liu Xiaoming 2006), “indirect passive” (Liu Yang, forthcoming), but there has been no temporal discussion regarding the expression “*raretashi*” for requesting action in early modern language.

This paper aims to utilize corpora to elucidate the diachronic changes of the expression “*raretashi*” for requesting action in early modern language, focusing on the following research objectives: Diachronic characteristics of the expression “*raretashi*” for requesting action in early modern language; Distribution of subcategories of the expression “*raretashi*” for expressing desires in early modern language; Characteristics of verbs used in the expression “*raretashi*” for requesting action in early modern language; Characteristics of registers in which the expression “*raretashi*” for requesting action is used in early modern language.

In this paper, using CHJ and SHC, we investigated the diachronic characteristics of the expression “*raretashi*” for requesting action across the Meiji, Taisho, Showa, and Heisei periods. The results revealed that the usage frequency

近代語における行為要求を表す「られたし」(劉洋)

of “*raretashi*” for requesting action was highest during the Meiji and Taisho periods. Subsequently, a decrease in usage was observed during the Showa and Heisei periods. Furthermore, significant fluctuations in frequency have occurred since the mid-Meiji period, with the usage predominantly centered on sentence-final position. Regarding register-specific features, it was found that newspapers, textbooks, and magazines were prominent, but the usage frequency decreased across registers from the Meiji and Taisho periods to the Showa and Heisei periods.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程2年)